

八代集抄

子藏本二二四五

三十八

特別
イ 4
3163
104(38)

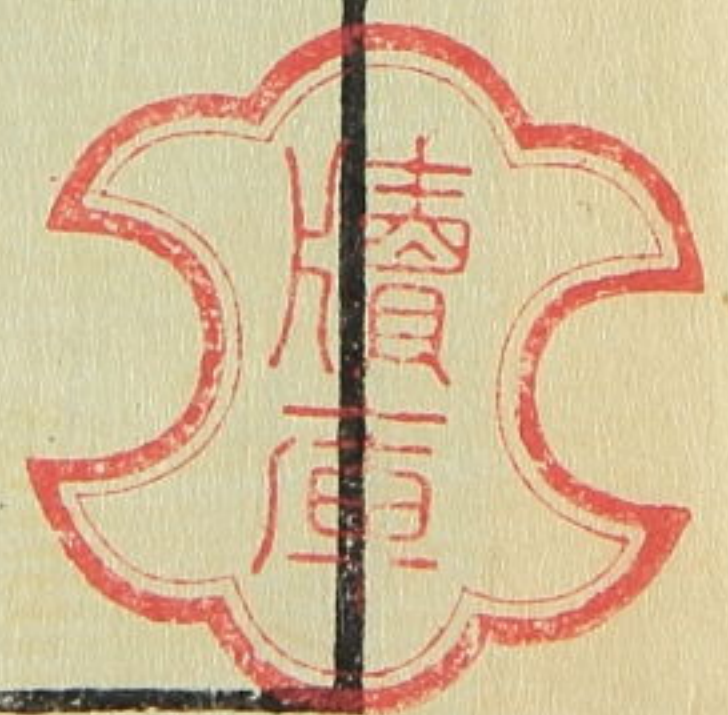


貴
14
3163
104(28)



あふいほ乃をりて
言音縁奇大抵おそ
序弄也いゝまゝ
こいふ乃をこいふ
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす

千載和歌集巻第十一
為弄一
海川院乃淨時日音のあふを乃をりて
初巻乃心をよめる
あふいほ乃をりて
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす
あふを乃をす



たつて

はるかに... 大納言成道... 百首の舞... 大納言門右大臣... 大納言の... 大納言の... 大納言の...

大納言成道

全書... 鞠全... 後集

はるかに... 大納言の舞... 大納言門右大臣... 大納言の... 大納言の... 大納言の...

二二

磐手山... 大納言の... 大納言の... 大納言の... 大納言の... 大納言の...

大納言の... 大納言の... 大納言の... 大納言の... 大納言の... 大納言の...

こころを晴らしたく
乃のまをすまはさし
あけまゝあまのまを
心りせまのつねを
河のいれくえれたま
れ
企たれぬまあをれ
下もかりよまを
あつらへく
くんのまを
舟のやまを
まかり
こころを晴らしたく
あつらへく
いれくえれたま

こころを晴らしたく
あつらへく
いれくえれたま
人たれぬまあをれ
おのまを
まかり
く
こころを晴らしたく
あつらへく
いれくえれたま
心りせまのつねを
河のいれくえれたま

五十一 四

よのめを我をわく
社をわく
あつらへく
こころを晴らしたく
あつらへく
いれくえれたま
心りせまのつねを
河のいれくえれたま

よのめを我をわく
社をわく
あつらへく
こころを晴らしたく
あつらへく
いれくえれたま
心りせまのつねを
河のいれくえれたま
あつらへく
いれくえれたま
心りせまのつねを
河のいれくえれたま

従三位兼左大臣
太皇太后

藤原清通

藤原清通

藤原清通

藤原清通

序多しすくも八藤
屑焼しは標刺の糸糸
上三妙なりね氣を
志あくすまをけき
ちまこころ

いしきまの世のいらは
心ありれきん
人志れぬ国の川力
いしきとらふまう
てこ標を山奥列の
いふせん今のきうつ
序多しすくも八藤
大和の界の根を

よりの 刊記の取捕

いしきまの世のいらは
あはれいもても人よき
照法師

人志れぬあ午乃川此子
いしきとらふまう
照法師
いふせん今のきうつ
わりの子まくと志る人乃まき
志乃百首此あ午乃作る時

とらふ

いしきとらふまう
公乃長きうつ
あはれいもても人
はれいもても人のや
難者人いまをよほれ
いしきとらふまう

いしきとらふまう
は神のまのあまを
いふよ別ねあまの我
君代国の原は鹿を
人よ別ねあまのいほ
祓の原は鹿をいほ
いしきとらふまう
人よ別ねあまのいほ

志乃百首此あ午乃作る時

はれいもても人のやあまきり乃
あはれいもても人のやあまきり乃
志乃百首此あ午乃作る時
あ午乃川此子ね乃と成ねれ
人よ別ねあまのいほ

二条院乃時う乃あのこと
首のあまり乃の時よあま

原乃子らよのね
通徳寺安徳皇子四柱

と川の流よあはれ
我の心にかまきり
馬の意の心し尾花
少肉のきせし者所
いづれいづれより
世をいづれとせし
うま世と厭離も
る橋とさひらこ
何やうしとをを
向りて執事をと
ひる身と國と
とちり何のいあめれ
何務物にのみ
る方やといふ
て我の心よ

我の心にかまきり
とちり何のいあめれ
何務物にのみ
る方やといふ
て我の心よ
横川乃麓ある山寺
る時いづれ
後てきり
世をいづれとせし
何やうしとをを
むる身と國と
とちり何のいあめれ
何務物にのみ
る方やといふ
て我の心よ

仁昭法師

鐵正親實

山内
山内

花園大官

大官太政大臣

前中納言伊房

春後親子

時舟を本舟より
人とてを求め
ねと信の
ありき
もあく
あの子
二十
我の
いづれ
思ふ
月日
恥
れと
この

又もあく
とちり何のいあめれ
何務物にのみ
る方やといふ
て我の心よ
又もあく
とちり何のいあめれ
何務物にのみ
る方やといふ
て我の心よ
又もあく
とちり何のいあめれ
何務物にのみ
る方やといふ
て我の心よ
又もあく
とちり何のいあめれ
何務物にのみ
る方やといふ
て我の心よ

二條院御製

この心よ

テラセ
新國法師 山正明

乃足てぬ子のれを
紅海とく我守り
いろをえすこと
伊勢物語のよきね
心をせんぐり乃
あけまはしよめ通
我床の志の乃奥
志の乃奥の奥列
信史の事我床小
思ひくこゝろを因縁
知人らまを以て後
君こそあつるあつる
思ふまじひのあつる
又ゆる斗圓の縁心
し時あつるあつる

乃足てぬ子のれを
いろをえすこと
伊勢物語のよきね
心をせんぐり乃
あけまはしよめ通
我床の志の乃奥
志の乃奥の奥列
信史の事我床小
思ひくこゝろを因縁
知人らまを以て後
君こそあつるあつる
思ふまじひのあつる
又ゆる斗圓の縁心
し時あつるあつる

後部有休成仲

二条院お屋左富常陸

乃足てぬ子のれを
紅海とく我守り
いろをえすこと
伊勢物語のよきね
心をせんぐり乃
あけまはしよめ通
我床の志の乃奥
志の乃奥の奥列
信史の事我床小
思ひくこゝろを因縁
知人らまを以て後
君こそあつるあつる
思ふまじひのあつる
又ゆる斗圓の縁心
し時あつるあつる

乃足てぬ子のれを
いろをえすこと
伊勢物語のよきね
心をせんぐり乃
あけまはしよめ通
我床の志の乃奥
志の乃奥の奥列
信史の事我床小
思ひくこゝろを因縁
知人らまを以て後
君こそあつるあつる
思ふまじひのあつる
又ゆる斗圓の縁心
し時あつるあつる

從二位頼政

不火とてうんぬん

馬ひねらういふこと

あつたのうたを

さうも思ひは國の

乃よりよわね

母あつたお國

大納言階子

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

皇太后院別当

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

大納言

あつた

あつた

大納言

あつた

あつた

大納言

あつた

あつた

あつた

藤原伊總 刑部卿

あまのついでに
よみかへし
はるかに
まことの
あまのついでに
よみかへし

あまのついでに
よみかへし
はるかに
まことの
あまのついでに
よみかへし

藤原季経 刑部卿

あまのついでに
よみかへし
はるかに
まことの
あまのついでに
よみかへし

あまのついでに
よみかへし
はるかに
まことの
あまのついでに
よみかへし

皇太后官大夫俊成

あまのついでに
よみかへし
はるかに
まことの
あまのついでに
よみかへし

あまのついでに
よみかへし
はるかに
まことの
あまのついでに
よみかへし

あまのついでに
よみかへし
はるかに
まことの
あまのついでに
よみかへし

千載和歌集卷第十二

恋舟二

堀河院乃清時百首乃舟なる
時恋乃心をよみ侍るる

大納言公實

舟のあり人よとらふやも無難は
ひすしぬあふり袖をぬるやと

源光朝臣 花園左大臣

こりあくと人よ心を片くすなり
舟乃こめりこりおのいりや

舟のあり人よとらふやも無難は
ひすしぬあふり袖をぬるやと
こりあくと人よ心を片くすなり
舟乃こめりこりおのいりや

ありんとおのいりや
ひすしぬあふり袖をぬるやと
こりあくと人よ心を片くすなり
舟乃こめりこりおのいりや

二条大皇太后宮大式
わらなうこりおのいりや
白河院三条殿よりおのいりや
おのいりやこりおのいりや
舟乃こめりこりおのいりや
舟乃こめりこりおのいりや
舟乃こめりこりおのいりや
舟乃こめりこりおのいりや

うりわらふ人を初康
 言ふ初康の世を初
 初康の心と見れば
 乃初康の世を初
 人の心と見れば
 えけられたる世
 乃初康の世を初
 近代秀吉の世を初
 と云ふて初康の世
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初

うりわらふ人を初康
 言ふ初康の世を初
 初康の心と見れば
 乃初康の世を初
 人の心と見れば
 えけられたる世
 乃初康の世を初
 近代秀吉の世を初
 と云ふて初康の世
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初

我志の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初

我志の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初
 初康の世を初

キタリアサヒ
 推中納言俊忠

徳大寺貞昌

源雅光

野崎の備八やめ
近江花兼お流る
こと我神乃り

くぬれりまよ
くぬれりまよ

何うこととよの年月
いつを逢風と整

おれ共令の限り
おれ一とよのま今

別をわすれり
えりわりのまよ

こひわりの洞の
いせよのまよ

おれはの世と
おれはの世と

いとわし神とぬれり
いとわし神とぬれり

敦原重基

何うこととよの年月
いつを逢風と整

おれ共令の限り
おれ一とよのま今

中院入道雅定公大長中將子持

奇令志結り
奇令志結り

敦原宗兼

こひわりの洞の
いせよのまよ

おれはの世と
おれはの世と

百首乃奇
百首乃奇

くらのく乃とら
くらのく乃とら

公定お十細の
公定お十細の

おれ共令の限り
おれ一とよのま今

おれはの世と
おれはの世と

こひわりの洞の
いせよのまよ

おれはの世と
おれはの世と

あさの霞を
あさの霞を

おれはの世と
おれはの世と

乃神もぬれり
乃神もぬれり

前泰儀

くらのく乃とら
くらのく乃とら

おれ共令の限り
おれ一とよのま今

おれはの世と
おれはの世と

こひわりの洞の
いせよのまよ

おれはの世と
おれはの世と

あさの霞を
あさの霞を

おれはの世と
おれはの世と

乃神もぬれり
乃神もぬれり

乃神もぬれり

ねむきかきし

まひりしつゝおの

まひりしつゝのま

海士のこゝろ

ゆきしつゝりし

ゆきしつゝりし

ゆきしつゝりし

ゆきしつゝりし

ゆきしつゝりし

ゆきしつゝりし

ゆきしつゝりし

ゆきしつゝりし

ゆきしつゝりし

ゆきしつゝりし

権大納言實國

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

権大納言實家

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

権大納言實家

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

権大納言實家

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

権大納言實家

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

権大納言實家

まひりしつゝ伊勢の

まひりしつゝ伊勢の

権大納言實家

まひりしつゝ伊勢の

その心を白紙の
紙にまきよきあり
しるはるん身はか
多きより思はんま
ぬ命をまかりしま
斗しきくはいと
ひ死にまよありし
すこの世
今いさあひいんま
けらまを死ねぬ
上よのうしん人の罪
あはれいんま
成りしといふ一書
いかにいかに
いとあはれいんま

其のまて流る道因法師
いかにいんまはか
からんまをましくと
贈大長長實八条り家
まをよめる 古京大史
今いさあひいんま
いのちとあはれいん
死すこと 平忠盛
いとあはれいんま
はまあはれいんま

垣燦燦たり一あり
いとあはれいんま
あはれいんま
まをちねむ
萬葉九ニ古之無荒下
刊各競妻同為祢牟
葦子屋乃菟名目鹿女
乃奥城矣 下畧又句九
墓上乃木の枝あひ
花山院乃木の枝あひ
女をちねむ
生田のよあはれいん
其のまの墓を中
のちとあはれいん

其のまて流る道因法師
いかにいんまはか
からんまをましくと
贈大長長實八条り家
まをよめる 古京大史
今いさあひいんま
いのちとあはれいん
死すこと 平忠盛
いとあはれいんま
はまあはれいんま

是れより一せむいよ由
よふまにせむいよ由

源師光

よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由

よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由

道因法師

よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由

よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由

源崇法師

よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由

よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由

源崇法師

よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由

よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由

朝高法師

よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由

よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由

二系院内侍

よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由

よふまにせむいよ由
よふまにせむいよ由

殷富門院大輔

從五位上信成女

わつたる歌の
人なりしわが
君をうらみ
ちいれお
めらす
お母は
と
の
は
母を
わが
よ
ま
ま

歌を
氏子の成苑
わつたる歌
きる人
大宰大貳重家
わが
刑
わが
わが
わが

五十一
廿二

心りや万葉乃
風林
抄乃
さ
た
一説長門
下
ま
や
う
た
ま

くの時
推中
そ
い
無乃
系蓮法師
お
何
後
ま

はれしうもあめ
せ。おぼれたまはる人
乃今班も、陣中の
おまをせまうめいけん
とらさごえれのやく
聞いしやちれいら
まていの髪えいせ
このやまー
かさうふねうし
僕もよ世は乃此の
やういれやうりうり
ぬいよもいよやと
くういよにまあは
あまのやういよ
とけしおさうよ

うまおし出りわさる
やういふねうしりて別
うりいれまうりつちわす
めんはあ乃七目の夜大納言宛
おついけるをえり日よあさ
よ人ついでにわいらりん
小大臣 舟人直
七うりりりりらとあひ
あさああらりりりりり
いしあ舟子津堂殿大
大臣

己れいせはあら
セタはあいつごい
きもいせなうけ
我いあはかりに
あしよあま名
うりやいせは
おまわらうい
りよけはいん
心乃つし
さうい
きしひい
人よ
今
乃

信濃守大臣
うりやいせは
けぬやあふ
あ
きしひい
しり
堀川院乃
時百首乃

あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を
あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を
あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を
あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を

あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を
あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を
あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を
あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を

あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を
あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を
あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を
あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を

あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を
あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を
あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を
あはれゆゑにわが身を
いそいでついでにわが身を

月のすのりも幸中
初幸奇合のよかり

多のめり野つら
万葉第春されん

伯翁乃幸くさいと

すし我えやん

野の居しき乃

しりまことあ

吾乃あま百葉

并し百葉乃奇

おめまかり野

ゆんまきしと

といんどう

まこよふま

案家月神

る

皇太后宮大史倭成

多のめり野つらる芝をす

伯翁のまき神抄に記あり

いづあまんとす乃ちま

すし我えやん

野の居しき乃

しりまことあ

吾乃あま百葉

并し百葉乃奇

おめまかり野

ゆんまきしと

といんどう

まこよふま

案家月神

冬乃月をすま

昔よりりて

無くせの言

初をさる言

皇太后宮建春門院

滋子贈大后時信女

及自の院名宮倉院安

よるけよをちま

万葉あまく

ちまかりあ

まこよふま

りあの言と

まこよふま

まこよふま

おまかりあ

冬乃月をすま

昔よりりて

無くせの言

初をさる言

皇太后宮建春門院

滋子贈大后時信女

及自の院名宮倉院安

よるけよをちま

万葉あまく

ちまかりあ

まこよふま

りあの言と

まこよふま

まこよふま

おまかりあ

院御製

早朝 群臣乃あるに
出仕せしめよ
さきより万の御事を
まじりし事も彼世
ひり奉進の人子之あ
とせりし事一もわ
げさるる御心
我無事より可難
恨の御情
けさるる御心
わくわく御心
馬はたつ御心
ありかた御心
まじりし事
まじりし事

けさるる御心
わくわく御心

花園方大臣の御心

待賢門院の御心

わくわく御心
まじりし事

百首乃并の御心

よよの御心 前奉後教長

わくわく御心
まじりし事

わくわく御心
まじりし事
花園方大臣の御心
待賢門院の御心
わくわく御心
まじりし事
百首乃并の御心
よよの御心 前奉後教長
わくわく御心
まじりし事

わくわく御心
まじりし事

右京大夫の御心

おひかりまこと
あまの江乃河のわね
言旨云神は河乃の縁
祢ハさうしても氣味も
つまよふの縁まふ
ゆ乃世とささひ傳
亦乃強よ若乃力ね
乃一極とささし者
此乃十ささしとさ
見くおさひよきて後
えんて河乃れと
左今辨とさほも自ん
あつ一程の祈神乃
今迄初て終りとの洞
子栲果との心も七

折返天良乃時家の年合子孫有_二無_一
とさうの心もあつ。 皇嘉門院別當
あまの江乃河のわね一よゆ
君をけりてさやこむわさる。 心
神逢_テ為乃心とささる。
お原公衛朝臣
えんて河乃れとささしとささしとさ
神のあつとささるくちとささる
藤原隆信朝臣
君やとれあつとささしとささしとさ

君やとれあつとささしとさ
日は難あつとささ人
乃心とささしとささ
いれくあつとささ
よりとささしとさ
人おちとささしとさ
えんて河乃れとさ
つまよふの縁まふ
ゆ乃世とささひ傳
亦乃強よ若乃力ね
乃一極とささし者
此乃十ささしとさ
見くおさひよきて後
えんて河乃れと
左今辨とさほも自ん
あつ一程の祈神乃
今迄初て終りとの洞
子栲果との心も七

あまの江乃河のわね一よゆ
君をけりてさやこむわさる。 心
神逢_テ為乃心とささる。
お原公衛朝臣
えんて河乃れとささしとささしとさ
神のあつとささるくちとささる
藤原隆信朝臣
君やとれあつとささしとささしとさ
あまの江乃河のわね一よゆ
君をけりてさやこむわさる。 心
神逢_テ為乃心とささる。
お原公衛朝臣
えんて河乃れとささしとささしとさ
神のあつとささるくちとささる
藤原隆信朝臣
君やとれあつとささしとささしとさ

片手にわしのまうりて
 ぬきぬきとまじつてこれ
 今人かもしいとおねの
 朽くらふよみさうし
 ありわいさうし合
 言ふにいふまに
 ちまあつてさうし
 かわゆさひらびら
 命はけし物さうし
 悪せねとこ思ふ
 悪まといかりていお
 乃てさうし
 梅平ちのよまうりわ
 梅平乃てさうし
 但ちさうし下まじつて

かしこひしめを志のあうまうらう
 影さうし
 道因法師
 ありわいさうし
 うまうらう
 さうし
 命はけし物さうし
 博悪せねとこ思ふ
 うまうらう
 乃てさうし
 梅原仲実朝長梅平ふゆちのよまうり
 さうし
 さうし

かしこひしめを志のあうまうらう
 小町集独わの信ま
 時にかまあつて月さ
 といふさうし
 男の給おの言し独ね
 乃てさうし
 世心ある人さうし
 とされぬとさうし
 あふさうし
 袖千るさうし
 及圓とさうし
 心をよまうらう
 さうし
 朽わつてさうし
 老人頭下の人

よまうらう
 梅原
 かしこひしめを志のあうまうらう
 ひらりと月をさうし
 焚火中つさうし
 内合人志重
 中原清重使六位
 あふさうし
 袖ひらりとさうし
 多相院清時老人頭下の人
 時かまあつてさうし
 梅原成親
 名取五流

教多品りの環翠軒
 林平殿上の苑人ふ
 春さる乃苑人あり院
 官多苑人ふと
 かくはつとと母の
 枯くはつとと二入
 乃をさつとと
 もすくありを
 の教多と母乃り
 くらとつとと林
 寺位で系位 位で系乃
 一系位深塵是安抄云
 位で系乃昔諸國下り
 へ納付試の口ばり
 洞物をあつととつと
 わけまはれとつとつと
 位で系位洞物と
 逢路とつとつと
 何とつと

おつとつとつとつと
 つとつとつとつと
 寺位で系位とつとつと
 乃原伊院

わけまはれとつとつと
 乃をさつとと
 乃をさつとと
 乃をさつとと

逢路とつとつと
 何とつと

此のやうきとやひす
 少きと少きと凡の
 早ゆとてお音相通
 とつとつとつとつと
 由備をさつとつと
 乃りお音相通とつと
 おつとつとつとつと
 人のあやめんはや
 志めんはとつとつと
 乃りお音相通とつと
 乃りお音相通とつと
 乃りお音相通とつと
 乃りお音相通とつと

此のやうきとやひす
 少きと少きと凡の
 早ゆとてお音相通
 とつとつとつとつと
 由備をさつとつと
 乃りお音相通とつと
 乃りお音相通とつと
 乃りお音相通とつと
 乃りお音相通とつと
 乃りお音相通とつと
 乃りお音相通とつと

乃原伊院

おつとつとつとつと
 つとつとつとつと
 乃原伊院
 乃原伊院
 乃原伊院
 乃原伊院

月の若かりて花
 ありたりやうと
 月より若る物なれ
 もく益 アサトマ
 其のいひね今に我もや
 梅他人 カク に我もな
 り他人の名をい
 つひよる カク も一我
 つひよりいひい
 にいひよる カク 花あり
 たりきれ カク の花あり
 うつ花をいひい
 に我もやいん カク
 たり カク といひいれ カク

月やましく月乃や
 梅他人 カク といひいれ カク
 内大臣
 其のいひね今に我もや
 名をいひい
 左近中将良経
 名をいひい
 女 カク といひい
 たり カク といひい

梅他人 カク といひい カク
 月より若る物なれ
 もく益 アサトマ
 其のいひね今に我もや
 梅他人 カク に我もな
 り他人の名をい
 つひよる カク も一我
 つひよりいひい
 にいひよる カク 花あり
 たりきれ カク の花あり
 うつ花をいひい
 に我もやいん カク
 たり カク といひいれ カク

月乃若る月乃
 梅他人 カク といひい カク
 源師光
 其のいひね今に我もや
 名をいひい
 左近中将良経
 名をいひい
 女 カク といひい
 たり カク といひい

小園事代多をいよ
たつては残の身乃君に
しとていふかたに
ひらきくうひし
悔一まゝのひら
こころをきき
きりてついでに
うらみしおれい
わきをとらねたお
きあふしんさん
うとわあつた
ひらきくうひし
まねねた
うちまゝのひら
人目をばいひ

いよまゝのひら
わきをとらねた
源光行
ひらきくうひし
けいじん目といと
皇天宮
これまゝのひら
ひらきくうひし
皇天宮
いよまゝのひら
人目をばいひ

乃いよまゝのひら
えいしつねのひら
しとていふかたに
ひらきくうひし
悔一まゝのひら
こころをきき
きりてついでに
うらみしおれい
わきをとらねたお
きあふしんさん
うとわあつた
ひらきくうひし
まねねた
うちまゝのひら
人目をばいひ

いよまゝのひら
わきをとらねた
源光行
ひらきくうひし
けいじん目といと
皇天宮
これまゝのひら
ひらきくうひし
皇天宮
いよまゝのひら
人目をばいひ

よのこにれいまりを

りやうんりやうんり

りやうめりやうめり

はれまき入をいりこか

りやうひねりやうひねり

乃景つりんやうりやう

しやうまきをいりまき

光ねねりしやうねねり

をわらういりまきりん

とあつりやうあつりやう

えりやうあつりやう

はれの度あつりやう別

床よあつりやうあつりやう

とあつりやうあつりやう

しやうあつりやうあつりやう

しやうあつりやうあつりやう

夢中^ニ契^ル意^トうつる^心をよめる。

大皇太后官山侍流

りやうめりやうめりやう

りやうめりやうめりやう

人よきりる。二条院清範

とあつりやうあつりやう

わりれり床よりまきりやう

法入^也きりる

とあつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

〇三三〇

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

かつりやうあつりやう

大皇太后^御符^ノ時百首の^事よき^にせ
侍^ルる^時は^相乃^并と^りよ^今侍
りる
持政前^大大臣

皇太后宮^大左^{兵衛}右^{兵衛}成

わらうあつりやうあつりやう

りやうめりやうめりやう

同日

千載和歌集卷第十四

三十四

和泉武部

いふはうらぬくもさし
くさかたはしほひも
しほひもさしほひも
せきよもさしほひも
春の物もさしほひも
よのひもさしほひも
昔もさしほひも
いふはうらぬくも
あはれもさしほひも
人乃あひさるわい
物来とさしほひも

いふはうらぬくもさし
くさかたはしほひも
しほひもさしほひも
せきよもさしほひも
春の物もさしほひも
よのひもさしほひも
昔もさしほひも
いふはうらぬくも
あはれもさしほひも
人乃あひさるわい
物来とさしほひも

花山院御製

いふはうらぬくもさし
くさかたはしほひも
しほひもさしほひも
せきよもさしほひも
春の物もさしほひも
よのひもさしほひも
昔もさしほひも
いふはうらぬくも
あはれもさしほひも
人乃あひさるわい
物来とさしほひも

いふはうらぬくもさし
くさかたはしほひも
しほひもさしほひも
せきよもさしほひも
春の物もさしほひも
よのひもさしほひも
昔もさしほひも
いふはうらぬくも
あはれもさしほひも
人乃あひさるわい
物来とさしほひも

小式部

せしむる

おのろくにかいりわさう
華やめりし物々言
こそもいふの恨い
おのろくさうつらんを
さくもはひしりけね
赤山の嶽さき結
つらまの心すも
かふれは人のまはして
狂しきうまはれん
いふらん我に秋葉
しすよとよひくれ
いそりもさよよと
竹乃系玉玉わく
詞花集五下

和泉武部

いん
か門とくもかきりさうははら
おのろくけね秋乃中ふれ
題さくも
かきり人そわすれくやみぬん
あきりことを狂ふのむら
女乃もさうりかみくゆりて
はりりくも松原実寸物信
竹乃系玉玉わく露乃中むれ
まゝおのろくもさく

五十四 十六

本乃よりわひれ
松浦さよひめり兼
五より力大伴依提比
古子このわりさ
て藩國小使せし時
主要松浦依用姫別
を驚かしてさよよ
て領巾を脱てね
きしきしきよ六我
かの人一人を被さ
姫よ比しよわら本
のるりようやま
いしせんこよま
まふさすまらわの
神津抄云道次といは

堀河院清時百首乃身なる時
悉乃心とよめる松原基俊
本乃よりわひれ
りいすしきまらくさよひわ

松原仲實朝臣

まふさくまらわの
ことわく秋乃中ふれ
法住寺入道前太政大臣内大臣
侍る時乃家もく
つる心と侍る源雅光

秋さりかふるけに秋
乃比人権のあわを
てを合せて吹る
らすくねりの鹿
まのうへ人をよふとくよふ人
鹿ありとさつせんと呼ぶ
まを合せてさつをよふとくよふ人
鹿ありとさつせんと呼ぶ
まを合せてさつをよふとくよふ人
鹿ありとさつせんと呼ぶ

少かせよくとね梢の花より
少かせよくとね梢の花より
少かせよくとね梢の花より
少かせよくとね梢の花より

大納言成通

逢不逢 ^{テルフ} 逢不逢
逢不逢 ^{テルフ} 逢不逢

あひえんとりいゆりし
あひえんとりいゆりし

乃橋國よよとめ
よりまきすい今乃
物さひをもすまき
まのさきし七塔と
橋添し師の絶
ひわひくありれ
いわれおゆりま
ありれ人の情はま
とまけくまき今
楚あなをわれ独あ
おくと黙さあま
けくはくし
りかつる人をほの
一とありま
人乃罪もようま
やれよきとま

あひえんとりいゆりし
あひえんとりいゆりし
あひえんとりいゆりし
あひえんとりいゆりし
あひえんとりいゆりし
あひえんとりいゆりし

伊三郎位若原教兼母

あひえんとりいゆりし
あひえんとりいゆりし
あひえんとりいゆりし
あひえんとりいゆりし
あひえんとりいゆりし
あひえんとりいゆりし

あすの人のまゝと

とまゝとさるゝまゝと

うほほとさ

うほほとさ 志州やふ

神樂身 閑野のこ

すけ 謙ゆりうひ

おひんや小菖とあ

おひんや小菖とあ

てかりよのまゝと

とよめとさるゝまゝと

い菖ゆりしとさるゝまゝと

うひの権後と清り

玉小菖い玉菖玉

わづれとさるゝまゝと

春原道經

うほほとさ 志州やふ

かまゝとさるゝまゝと

あつとさるゝまゝと

よりゆり

わづれとさるゝまゝと

あつとさるゝまゝと

崇徳院より首乃再なり

あつとさるゝまゝと

上西門院無末

今とて 鑑心社とせ

とさるゝまゝと

我社乃ありとや

湖は海松わ布とせ

あひんや乃とさるゝまゝと

小菖ゆりしとさるゝまゝと

おひんや乃とさるゝまゝと

あつとさるゝまゝと

志をのふとさるゝまゝと

饒摩市情と饒摩

郡と市と物と交易

すれとさるゝまゝと

あつとさるゝまゝと

我社乃ありとや 海松と

あつとさるゝまゝと

あひんや乃とさるゝまゝと

志のふとさるゝまゝと

あつとさるゝまゝと

皇太后宮太皇太后

志をのふとさるゝまゝと

あつとさるゝまゝと

待賢門院安藤

あつとさるゝまゝと

小島よりくももき
かりしをききし

志すのこすの池
菅田池スガタ入ソノカミは

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

浅間野 佳信ハササキの
川ハササキ細江ハササキ遠江ハササキ

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

菅原信輔スガハラの
書

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

百首乃舞ヒャクシュノマユよ
子コ乃ノ可カ乃ノ舞マユ

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

平實ヘイジツ重シゲ
富トモ交カ昌昌隆隆子子
金金業業化化心心

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

とらん序きんを
のこすの池

カレハ清夢のまじりなき
花の香も草の香も
そこの川花も花も
心も我もあはれ
我があはれは心も
芝草も先し花も
心も花も清夢のまじり
のこもまじりなき
まじりなき
次飯浦如最之次
のまじりなき
心も花もあはれ
心も花もあはれ
心も花もあはれ
心も花もあはれ

二巻院内約巻河

まじりなき

心も花もあはれ

まじりなき

續改

心も花もあはれ

まじりなき

心も花もあはれ

まじりなき

梅坂前太夫

竹の人の涙を花とお
かきこくさし歌を
後まつ丹苑折乃中
け舞をる舞とさ
つり中明おあわ
あつてかたき
まじりなき
今の跡さし花を
あつてかたき
まじりなき
まじりなき
まじりなき
まじりなき
まじりなき
まじりなき

まじりなき

心も花もあはれ

まじりなき

前中納言雅頼雅兼字

まじりなき

心も花もあはれ

後香増カニニス

拵中納言在中英え房子

まじりなき

心も花もあはれ

かゝるれねつとてあわ
せのちち物をゆゑにうり
りよまふとてしるす
あやふきめんしとてし
うしくすことまこと
わされぬやあやふし
あつねすれしとてし
しとてむね乃又あふ
まんのうまことし
ふつあふしとてし
あひつねねねね
はれぬ人しとてし
しとてし
又あひつねね
しとてし
はれぬゆりねとてし

あけ書乃書をよみに徳なる女
色ましくなり形をよみ人
なはつうに
右近守將忠良
わされぬやあやふし
あつねすれしとてし
しとてむね乃又あふ
まんのうまことし
ふつあふしとてし
あひつねねね
はれぬ人しとてし
しとてし
又あひつねね
しとてし
はれぬゆりねとてし

信直法師

殷置門院大補

百十四 廿二

んせまやまにやの
雲青云雀乃袖めり
ゆきまらぬわねわれ
このかたぬり我神の後
よきまらぬわねわれ
あつねすれしとてし
あひつねねね
はれぬ人しとてし
しとてし
又あひつねね
しとてし
はれぬゆりねとてし

んせまやまにやの
雲青云雀乃袖めり
ゆきまらぬわねわれ
このかたぬり我神の後
よきまらぬわねわれ
あつねすれしとてし
あひつねねね
はれぬ人しとてし
しとてし
又あひつねね
しとてし
はれぬゆりねとてし

信直法師

右近守將忠良

おのじまやうらり
うもまきやうけい
睦のきものうらり
いまあうし猪すじれ
いぬを待たぬまき
ねをちかるとして
あたまわらひやう
いせひまがよひ
わらふあつていね
短束のあまのき
すまけれの衣も
あつていねあま
あつらうとあま
あまは人のあつて
いぬを待たぬまき

後鳥羽院
おのじまやうらり
あまのきものうらり
いぬを待たぬまき
あたまわらひやう
いせひまがよひ
わらふあつていね
短束のあまのき
すまけれの衣も
あつていねあま
あつらうとあま
あまは人のあつて
いぬを待たぬまき

後鳥羽院

おのじまやうらり
うもまきやうけい
睦のきものうらり
いまあうし猪すじれ
いぬを待たぬまき
ねをちかるとして
あたまわらひやう
いせひまがよひ
わらふあつていね
短束のあまのき
すまけれの衣も
あつていねあま
あつらうとあま
あまは人のあつて
いぬを待たぬまき

後鳥羽院
おのじまやうらり
あまのきものうらり
いぬを待たぬまき
あたまわらひやう
いせひまがよひ
わらふあつていね
短束のあまのき
すまけれの衣も
あつていねあま
あつらうとあま
あまは人のあつて
いぬを待たぬまき

おもせしきまされに
 我よちんゆらわ
 くらわはねをよわ
 無徳くうらね
 夢みもきぬ歌
 夢みよふあひ
 さつらうらむ
 わいほふられし
 うれふにゆき
 枕をさしゆい
 君う床別れ
 第五うとよ
 片きけし
 君とくさ

夢ひくゆりくる女乃せう
 ちこしよふか
 くるをわ
 ばりし
 か
 枕大納言實家
 わいほふられし
 ねとぬ
 片きけし
 君とくさ

かしらゆはとれ
 枕うくく
 さう枕の
 とも思ひ
 何れか
 別くのちり
 を夢し
 へし
 心別
 乃
 夢み
 志ね
 あり
 あり

まくし
 近
 これ
 何れ
 推中納言通親
 志ね
 夢み
 あり

うたねのそとく
古今引くおのそ
まををうとくわわ
めりおのれおのれ
けをを本奇りて
人乃能る成事て
あまをのそとく
見ゆやとれおの
くまをねおのそ
おををけの神の
心いぬ
そまのそとく
神のそとく

千載和歌集卷第十五

恋舟ふ

歌三十一 相模

うたねのそとく
あまをのそとく
あまをのそとく

和泉式部

おををけの神の
ねををけの神の
あまをのそとく
あまをのそとく
あまをのそとく

よれは乃乃のまゝ
つれいねうらまへく
こころをなれと

何れ明乃乃又ま
月又すま

乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ

何れ明乃乃又ま
人乃あつたまのまゝ

茶武部

乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ

わすれいふまのま
人乃あつたまのま
幸れあつたまのま
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ

乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ
乃乃のまゝ

相模

一十年くもあひまき
 せよゆかり梅路心
 乃古藤乃如くま
 朽果しるよめり
 ま人のまをりをたれ
 りともりさ
 うふとわかれぬ
 恨ころりあす
 甘くかきしあま
 中落るるもあま
 きれの白根すま
 す娘とてあま
 人あまあま
 一はかしのあま

播川院乃清時百首のあま
 々々時根乃あまよめ
 うふとわかれぬ人あま
 おのひあまてうあま
 花園有仁公乃家乃侍々あま
非定公申細言あまあま
 かわらわんるあま
 くれあまやあま
 ありんあま
金葉集公
乃藤乃通家

一十年くもあひまき
 せよゆかり梅路心
 乃古藤乃如くま
 朽果しるよめり
 ま人のまをりをたれ
 りともりさ
 うふとわかれぬ
 恨ころりあす
 甘くかきしあま
 中落るるもあま
 きれの白根すま
 す娘とてあま
 人あまあま
 一はかしのあま

赤津清門
 中細言國信家乃年合々あま
 ありんあま
 ひとあまあま
 ありんあま
 ありんあま
 ありんあま

神皇正統記
 神代卷の末
 天照大神
 皇孫降臨
 神武天皇
 神代卷の末
 天照大神
 皇孫降臨
 神武天皇

神代卷の末
 天照大神
 皇孫降臨
 神武天皇
 神代卷の末
 天照大神
 皇孫降臨
 神武天皇
 神代卷の末
 天照大神
 皇孫降臨
 神武天皇

古事記

大御宗子御孫

皇太子

神武天皇

神武天皇
 神代卷の末
 天照大神
 皇孫降臨
 神武天皇
 神代卷の末
 天照大神
 皇孫降臨
 神武天皇

神代卷の末
 天照大神
 皇孫降臨
 神武天皇
 神代卷の末
 天照大神
 皇孫降臨
 神武天皇
 神代卷の末
 天照大神
 皇孫降臨
 神武天皇

古事記

大御宗子御孫

皇太子

神武天皇

てははら白よきみ
 うけ人よにぬぬ
 ちきよしつと物と
 元教めせふふ
 ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と

ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と
 ちきよしつと物と

千十五九

國はをさすらり
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日

九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日
 九月廿二日

前中納言

大納言
 中納言
 前中納言

うつてい清きも
そ又せね根をす
とし何はあはれ
あうらわちあかり中
あうらわらふこ
あしきのあしき
あしきあしき
あしきあしき
あしきあしき
あしきあしき

あうらわちあかり中
こ乃母ういれ
秋、あしきと
あしきあしき

弘昭法師

あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき

冬儀教長

あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき

仁和寺後

あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき
あしきあしきあしき

馬内侍

これぞわが心ぞよ
くはれはとてんぞ

わが心は馬場の
我が心はこころ

油をぬきし
とてくはれは

わが心は毎
みまことり

わが心はわが
わが心はわが

わが心はわが
わが心はわが

わが心はわが
わが心はわが

和泉武部

わが心はわが
わが心はわが

わが心はわが
わが心はわが

わが心はわが
わが心はわが

わが心はわが
わが心はわが

わが心はわが
わが心はわが

わが心はわが
わが心はわが

わが心はわが
わが心はわが

わが心は

和泉武部

